

Title	活動報告
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾大学グローバルCOEプログラム論理と感性の先端的教育研究拠点
Publication year	2009
Jtitle	Newsletter Vol.8, (2009. 6) ,p.6- 7
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12002003-00000008-0006

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

活動報告

開催日	研究・運営プログラム名	会議等の名称
4月4日	慶應義塾大学研究支援センター本部 慶應義塾大学グローバル COE プログラム	「世界最高水準の教育研究拠点の構築と運用 ーグローバル COE：若手研究者育成、国際戦略そして持続的発展」
5月13日	研究成果発信支援・プログラム委員会	英文論文執筆のための講習会
5月21日	慶應義塾大学文学部心理学研究室、全体	Dr. Soo-Young 講演会 “An unsupervised-supervised hybrid feature extraction of subtle emotional differences from human speeches”

公開シンポジウム <文化と医療>再考—人類学と文化精神医学の相互関与性の現在—

Rethinking Anthropological and Transcultural Psychiatric Studies on Culture and Medicine: the Challenges of Interdisciplinarity, with Reference to Implications for Advanced Research on Logic and Sensibility

(2月25日 G-SEC セミナー室・G-SEC Lab)

2月25日、日本文化人類学会関東地区研究懇談会の共催支援をうけ、公開シンポ形式で企画実行した〔第I部（15：30～17：15）：東館GSECセミナー室、第II部（18：15～20：00）：同G-SEC Lab—— Laurence J. Kirmayer マッギル大学教授（文化精神医学：H20年度社会学研究科特別招聘教授）の基調講演“Cultural psychiatry, medical anthropology and the challenges of interdisciplinarity”、清水透慶大教授（ラテン・アメリカ社会史）「呪医と村人、そして私：ラテン・アメリカ社会史研究から医療民族誌へ、そして現代医療の諸問題へ」、波平恵美子お茶の水女子大学名誉教授（医療人類学）「日本における文化と医療の研究：医学史から医療人類学まで」、宮地尚子一橋大学准教授（文化精神医学）による指定討論、司会・宮坂敬造の問題提起と総括、通訳・東京大学 Mohacsi Gergely 氏という構成——人類学—医療人類学—文化精神医学という相互関連性の深い分野間の交流セミナー機会設定、文化医療人類学の広範な動向を文化精神医学との接点・相互関与性の地平から確認、時代や文化・社会の基盤によって異なる様相を示す身体・感情・論理の研究に資す学際的感性の検討を狙いとした〕。宮坂が「文化と医療の経験の場の構造の時代転回：学際的相互関与性が発生する場」と題して問題提起。清水先生は、メキシコ現地村人と調査者との共感的感性成立過程、長期間の深い繋がりを志向する感性の要件を指摘。カーマイヤー先生は基調講演で、一精神医学徒として M. Lock, B. J. Good, A. Young 等の文化人類学・医療人類学者たちと出会って学際領域の共通地平に深く導かれた経緯、また、近年のグローバリゼーション進展で文化概念・旧メタファーの革新の必要が生じた際、深層の共通地平の根底に立てればこそ文化精神医学革新をなした事情、更に人類学との共通地平に立って脳科学に文化要因考慮の枠組を組み入れる研究の必要性を検討した。波平先生は、医療人類学が60年代後半北米で興隆した後に日本での分野紹介と

発展を担った個人的経緯、日本の文脈ではこの分野の先駆けとなったのは医学系臨床研究者であった事情を述べた。宮地先生は、既存領域の区分からずれていくところで現実動態に有効な臨床・研究実践の契機が生まれるとし、そうした場に立つことこそが学際的共通地平に辿りつく前提となると指摘した。討論では、カナダ先住民調査でポストコロナル状況の問題点をくぐりぬけた調査者と、近代的医療の一部動向にも関与する現地伝統的治療者との相互関係が検討され、<文化的論理>・感性・感覚の文化人類学という新動向に関係する論点も出た。平日で国立大入試日だったが、日本文化人類学会若手研究者を中心に70名以上が参集し、第II部では医師・精神科医も加わり、盛況であった。共催者の同学会・山本真鳥会長と同・葛野浩昭理事のご尽力に感謝したい。

(宮坂敬造)

The main theme of this conference consisted in re-anchoring the common foundational paradigm, across the interdisciplinary pursuits, encompassing cultural-transcultural psychiatry, social history and cultural-medical anthropology, for the human mind as it appears in its cultural-transcultural manifestations, with a specific relevance for contemporary globalizing world situations and their localized correspondent repercussions. The above Japanese report offers a more detailed outline.



Philosophy of Ontology and Logic 国際シンポジウム

International Meeting on Philosophy of Ontology and Logic

(3月27日 慶應義塾大学三田キャンパス東館ホール)

平成21年3月27日に慶應義塾大学三田キャンパスで上記の国際シンポジウム及び関連チュートリアルが本研究拠点が共催して開催された。また2月28日-3月1日にも関連セッションが行なわれた。現代形而上学や知識のオントロジー的構造化や論理構造とオントロジー構造との関係、オントロジーと知覚の関係などを含むオントロジー、知識構造、現代形而上学に関する哲学、AI・情報科学、生命科学などを含む学際的討議が行われた。

27日の本会議の主な招待講演として加地大介教授(埼玉大学)による“Four kinds of boundaries: From an ontological point of view” Jinho Kang 教授による(Seoul National University) “The Early Wittgenstein on Logic and Metaphysics” Peter Simons 教授(Trinity College, Dublin)による“The Ontology of Quantity, and Why it Matters” 講演が行われ、また Barry Smith 教授(New York State University)、Alan Ruttenberg 博士(Science Commons)、溝口理一郎教授(大阪大学)による ontology の生命科学やセマンティックウェブや知識情報工学への応用に関するチュートリアル特別講演も行なわれた。

また、一ノ瀬正樹教授(東京大学)による“Ontological Vagueness and Metaphysics: A Case of Freewill”、Peter Simons 教授(Trinity College, Dublin)による“Formal Foundations of Ontology”の招待講演も関連セッションで開催された。100名を超える参加者があり、27日会議後の懇親会も有意義な学際交流の場となった。

(岡田光弘)

The International Meeting on Philosophy of Ontology and Logic and related applied ontology tutorials as well as associated sessions took place at the Mita Campus of Keio University. More than 100 people participated in the interdisciplinary meeting. The topics included contemporary analytic metaphysics, ontology, their relations with logic, their applications to knowledge representations, knowledge engineering, life science on databases and others.



研究員紹介

鈴木康則

2009年4月より非常勤研究員となりました。鈴木康則と申します。近現代のフランス思想、とりわけジャック・デリダの哲学を主な研究対象としております。デリダの思想は「脱構築」や「差延」のような幾つかのキーワードで語られることが多いのですが、そうした用語が必要となる背景についての理解を深めることを自身の課題としております。というのも、重要な思想が語られる背景においては、当の思想家たちに固有の「論理」と呼ぶべきものが内在していると思われるからです。「論理」を明らかにする研究手法は現在多数ありますが、自分はデリダと現象学の関係を辿りなおすことで、そうした「論理」の一部を提示できればと考えております。

高橋甲介

2009年4月より「脳と進化班」の非常勤研究員となりました高橋甲介と申します。私は主に、知的に障害のある自閉症児における言語や認知の指導法の技術的な向上に関して実験的に検討しております。特に論理的な関係性の学習において、事象間の「時間」や「空間」という要因を操作することによって、どのくらい学習を援助することができるかなどについて興味を持って取り組んでおります。また実験的に明らかになった事実を実際に指導する中でいかに役立てるかなどについても試行錯誤しながら楽しく検討を行っています。よろしくお願ひ致します。

佐々木掌子

ジェンダーとセクシュアリティを心理学的に明らかにしていくことを研究テーマとしています。特にトランスジェンダー(医療現場では性同一性障害と呼ばれます)やインターセックス(現在は性分化発達障害と名称が改められました)など、ジェンダーやセクシュアリティの非典型性に関心があります。ここグローバルCOEでは、遺伝と発達班に所属し、双生児データを用いた行動遺伝学分析から、ジェンダー/セクシュアリティ行動の遺伝と環境の諸相を明らかにしていきたいと思ひます。

また、病院で性同一性障害などジェンダーやセクシュアリティについて問題を抱えた人やそのご家族等に対してカウンセリングも行っています。臨床心理士です。

日本学術振興会特別研究員

(グローバルCOE) 一方井祐子

社会学研究科心理学専攻の一方井祐子と申します。私は、社会性鳥類の個体関係の形成・維持に関わる認知能力等を研究しています。個体関係を維持するためには自分と相手との関係を理解して行動することが必要ですが、時には他個体同士の関係まで理解することが必要になります。今後、霊長類で見られるこのような認知能力が社会性鳥類で見られるかを調べ、収斂進化の過程を探りたいと考えています。どうぞ宜しくお願ひ致します。

